# 『シャーロット・ブロンテの生涯』研究（20）

## E. F. ベンソン

## A Study of *The Life of Charlotte Brontë* (20)

芦　澤　久　江

### 1．はじめに

ギャスケル（Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65）の『シャーロット・ブロンテの生涯』（*The Life of Charlotte Brontë*, 1857）はシャーロット（Charlotte Brontë, 1816-55）の伝記の古典として現代でもなお残っている。しかし時代を経るごとに、シャーロット像は変化している。ギャスケルはヴィクトリア朝時代の価値観に基づいて、シャーロットがいかに女性らしく、献身的な親孝行娘であるかを描いたが、現代ではシャーロットの隠された事実が明らかにされ、また彼女の深層心理を分析することによって、新たなシャーロット像が生まれている。

ベンソン（Edward Frederic Benson, 1867-1940）は、男性支配社会のヴィクトリア朝時代から、中産階級の父親像が崩れ始めるモダニズムの時代まで、価値観が混沌とした時代のなかを生き抜いた伝記作家であった。したがって、ヴィクトリア朝の価値観が壊れ始めた社会のなかで、ベンソンがシャーロットをどのように見ていたかを考察していきたい。

### 2．E. F. ベンソン

ベンソンが書いたシャーロットの伝記を考察する前に、ベンソン自身について簡単に述べておこう。ベンソン家の父親はカンタベリー大司教であったE. W. ベンソン（Edward White Benson, 1829-1926）であり、母親はメアリ（Mary Benson）であった。彼らには6人の子どもがいたが、生き残ったのは、アーサー（Arthur Christoper Benson, 1862-1915）、マーガレット（Margaret Benson, 1865-1916）、前述したフレデリック、ロバート（Robert Hugh Benson, 1871-1914）の4人きょうだいであった。[1] フレデリックだけでなく、アーサー、マーガレットも作家であった。

Sandersによれば、彼らの父親は専制的な父親というより、家庭に深く関与する父親であり、子どもたちの家庭生活を支配していた（213）。母親メアリは家族のなかで一番自由な存在であり、元カンタベリー大司教の娘ルーシー（Lucy Tayt）と同性愛関係にあり、メアリは夫の死後、彼女と同棲生活に入った。このような複雑な両親の家庭環境により、ベンソン家は理想的な中産階級の家族とは言えなかった。確かにベンソン家の子どもたちはこのことがトラウマとなっていたが、家族が唯一のよりどころでもあった（Sanders 220）。この時代の伝記は家族よりも自己の自律を扱うのに対して（Danahey 9）、ベンソン家のきょうだいの自伝では、彼らは自律ではなく、家族を

見直すことで、自己を探索していた。その点で、彼らの伝記は最近になって見直され始めているのである（Sanders 213）。

## 3．父親パトリック・ブロンテ

ヴィクトリア朝時代の心理学者たちは自己意識の形成においてどのような影響があったかについて関心を持っており、親が経験や環境を通じて獲得した特徴が子どもに影響を与えると考えていた（Taylor and Shuttleworth 67, 289）。E. F. ベンソンも、父親が自分だけでなく、きょうだいに与えた影響を伝記の中心テーマとしていた（Sanders 218）。それゆえベンソンにとって、悲劇的なブロンテきょうだいに父親がどのように関わっていたかを考察することは興味深いことだったにちがいない。むしろ、ブロンテの悲劇を自分自身に重ね合わせることで、ベンソンは内省し、自己への理解を深めようとしたかもしれない。

前述したように、ベンソンがブロンテの父親パトリックをどのように見ていたかは、もっとも興味深い部分ではあるけれども、彼はギャスケルの記述が間違っている点を修正しているものの、これまでのパトリック像を大きく覆すほど独自の見解を示してはいない。

しかしベンソンの記述にわずかではあるが、彼の主張を展開させている部分もあるので、それらについて考察してきたい。前述したように、ベンソンの家庭は特異だったため、子ども時代の家庭環境が子どもたちの心理に強く影響を与えていたということは前述したとおりである。

それではベンソンは、ブロンテの父親のどのような点がブロンテたちに影響を与えたと考えていたであろうか。彼は、パトリックが独学で本を読み、タイ師（Rev. Thomas Tighe）の子どもたちの家庭教師になったというエピソードを取り上げ、パトリックの自己教育、困難に打ち勝つ精神がブロンテ家の子どもに引き継がれたと述べている（Benson 3）。その例として、ブロンテ家の子どもたちは家庭教師になり、失敗はしたものの学校設立を計画し、そのための準備としてブリュッセルにまで行って勉強したということが挙げられている（Benson 3）。すなわち。パトリックのような困難にもめげない強靭な精神がブロンテ家の子どもたちに受け継がれ、彼女たちもまた幾度の失敗にもくじけることはなかったということである。確かに、ベンソンの主張は理に適っていると言えるであろう。ブロンテ姉妹、特にシャーロットは不屈の精神をもっていなければ、何度も挫折を味わいながら、小説出版まで漕ぎつけることはできなかったと思われる。したがってベンソンが主張しているように、パトリックの克己的精神はブロンテ姉妹の性格にも深く根ざしている（3）と言える。

またベンソンは、パトリックが苗字をブランティからブロンテと名前を変えたこともブロンテ姉妹に影響していると述べている（3）。つまり父親が苗字を変えたことをまねて、ブロンテ姉妹もまた作品を出版する際にペンネームで世間に登場したというのである（3）。

パトリックが苗字を変えた経緯について、ベンソンはギャスケルの説をそのまま踏襲しているが（2）、現在ではバーカー（Juliette Barker）によって、パトリックがなぜ苗字を変えたのかについ

て詳細に語られている（2-3）。バーカーによれば、パトリックがケンブリッジに入学した時、大学の事務員がパトリックのアイルランド訛りを聞き取れず、苗字を「ブロンテ」と勝手に変えてしまった（2-3）。それゆえ、パトリックが自ら進んで苗字を変更したわけではなかったのである。

ベンソンはまだこうした新事実を知らなかったため、ブロンテ姉妹は父親の影響を受け、本名ではなく、ペンネームを用いて本を出版したのだと解釈している。もしパトリックの影響を受けて彼女たちが名前を変えたのだとしても、ブロンテ姉妹がペンネームで出版するには深い理由があった。

ブロンテ姉妹がペンネームを用いたのには二つの理由があった。一つの理由は、ブロンテ姉妹は完全な秘密主義者だったので、作品を出版して世間に名前を知られることを恐れたからであり、もう一つの理由は女性が書いたということで過小評価されることを拒んだからである。したがって、パトリックがより高貴なブロンテという名前を選んだことと、ブロンテ姉妹がペンネームを使ったということには明らかな違いがあり、父親の影響を単に受けただけで、ブロンテ姉妹が苗字を変えたというベンソンの主張には説得力が欠けているのである。

前述したように、ベンソンは概ねギャスケルの伝記に依拠しているが、ギャスケル自身がのちに修正を加えている部分についても彼女の説を踏襲している。それはギャスケルの伝記が出版されたとき、パトリックの驚くべき奇癖が明らかにされた点である。

パトリックは子どもたちのカラーブーツが贅沢だと言って、暖炉にくべてしまったり（Gaskell 88-9）、妻の絹のガウンをずたずたに切り裂いてしまったり（Gaskell 89）、怒ると裏口でピストルを矢継ぎ早に撃ったり（Gaskell 89）といった理解しがたい行いをギャスケルはまことしやかに伝えた。しかしながら、これらのエピソードは、バーンリーに住んでいた、かつてブロンテ家に解雇された召使からギャスケルが得たものであり、このような事実はなかったと他の召使が証明している（Leyland 46-50）。

このようにパトリックに関するこれらの事実は真実ではなかったことが証明されているが、もしギャスケルがバーンリーの召使から聞いたこの話を本当だと信じていたとしても、それを伝記にそのまま描くというギャスケルの精神はどのようなものであったのであろうか。なぜならギャスケルに伝記執筆を依頼してきたのは他ならぬパトリック自身だったからである。たとえ真実だったとしても、ギャスケルは依頼主であるパトリックに深謀遠慮もなく、これほど辛辣に描くことに迷いはなかったのであろうか。

ギャスケルはこの伝記が出版されるまでパトリックが生きているかどうかわからない、もし生きていたとしても、年老いたパトリックはこの伝記を読むことができないと考えたからであるとベンソンは推察している（13）。しかしパトリックは伝記が出版されるまでどころか、それ以上に長生きをし、義理の息子ニコルズ（Arthur Bell Nicholls,1819-1906）にその伝記を音読してもらっていた（13）。ギャスケルはパトリックが変人であることを強調して、シャーロットの性格を正当化しようとしたとされているが、そうしたギャスケルの戦略に関連してフレンチ（Yvonne French）は興味深い指摘をしている。

ギャスケルは話が面白ければ、日付が間違っていても気にしなかったが、そうした行いは伝記と

いうジャンルの性質上、有責事項であるとフレンチは非難している（206）。フレンチが述べているように、伝記は時系列が非常に重要であるので、フレンチが述べていることは正しい。しかし異なる視点から見れば、ギャスケルは真のプロの小説家だったと言える。ギャスケルは、描く対象がたとえ友人シャーロットの父親であり、伝記執筆依頼主であっても、またそのエピソードが真実であろうとなかろうと、そのようなことは問題ではなかった。ギャスケルは話の筋の展開が面白ければ、事実を歪曲させても証拠のない話をまるで事実であるかのように書いた。これはモラル上問題と言えるかもしれないが、ギャスケルが真の小説家であるということも表しているのである。

ベンソンは、ギャスケルが訂正したにもかかわらず、その後に続いたブロンテ研究者が、まるで事実であるかのように、ギャスケルの伝記を踏襲している点が問題だとしている（15）。特に例を挙げると、ギャスケルのすぐ後に伝記を出版したリード（Thomas Wemyss Reid, 1842-1905）がその一人である（15）。結局、妻への不親切さはブロンテ一家をめぐる伝説の一部として語られるようになっており、また、子どもたちにふさわしい食事へのひどい無関心さについても、彼らが夕食にジャガイモしか食べていなかったという真偽のあやしい話から推論されている（Benson 15）。つまりギャスケルが撤回した話を後代の伝記作家たちが再び持ち出すのは、ストーリーの展開に合わせて都合がいいように利用したいからであり、そこにこそ問題があるベンソンは主張しているのである（15）。

パトリックのエピソード以外でも、ギャスケルの伝記のなかでベンソンが事実ではないと疑っているものがある。例えば、子どもたちは手に手をとって荒野に出かけていたというが（Gaskell 86）、アン（Anne Brontë, 1820-49）はこの時まだ20か月にすぎず、荒野に出かけることなど到底無理であったとベンソンは主張している（14）。したがって、ギャスケルの伝記はギャスケルが撤回してもなお、まるで真実であるかのように語り継がれている。それは読者がブロンテ家の悲劇をよりドラマチックであってほしいと期待しているために、事実ではないことも演出されたまま、語り継がれているのかもしれない。その結果、事実とフィクションが混在し、複雑に絡み合い、ブロンテ神話が生まれた。しかし現代においては、少しずつフィクションの部分が明らかになってきているが、そうした伝記が読者にとって必ずしも魅力的であるというわけではない。こうした点において、伝記は事実とフィクションの間を揺れ動き、曖昧なジャンルであるということがわかるのである。

## 4．カウアン・ブリッジ

ベンソンは、パトリックがカウアン・ブリッジ（Cowan Bridge）に入学させるときに、その学校に滞在し、子どもたちと食事をし、学校がいかに生徒を世話しているかを確認した上で、家に戻ったと述べているが（22）、これについての出所は明らかにされていない。またマリア（Maria Brontë, 1814-25）が亡くなったとき、パトリックはその原因が学校の管理の問題だとは考えていなかった（Benson 22）。なぜなら他の三人の子どもたちはカウアン・ブリッジに預けたままだったからである（Benson 22）。そして最後までパトリックはカウアン・ブリッジに満足していたと

いうのである（Benson 27)。ベンソンが主張しているように、パトリックはカウアン・ブリッジに対して何の訴えもしていないので、学校について不満を抱いていたわけではなかったかもしれない。

しかしシャーロットは違っていたであろう。彼女は『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）のなかで、ローウッド・スクール（Lowood Institution）としてカウアン・ブリッジを描いた。シャーロットは二人の姉を死に追いやった学校に強い怒りを覚え、小説に描くことで告発を試みたのである。ところがベンソンは、シャーロットは「子どもの心に刻まれた苦しい印象が巨大に膨れ上がり、大人になってもそのゆがんだ記憶や感情を本当に起こったこととして信じてしまった（“Painful impressions made on a child's mind grow to monstrous proportions, and the adult mind fully believes in the actuality of its own distortions.”)」(23）と説明している。すなわちシャーロットは二人の姉の死に強い衝撃を受けたうえに、学校への怒りを長い間、内に抑えていたために、その抑圧された感情によって記憶が歪み、カウアン・ブリッジを劣悪な学校だと誇張する結果になったのではないかとベンソンは分析している（27)。ベンソンのこの心理学的分析は非常に興味深い。シャーロットは確かに、感情を内にため込み、その抑圧された感情はコントロールを失い、その結果外に向かって大きく放出される傾向にある。

『ジェイン・エア』のジェインがまさにそうである。例えば、ジェインはロチェスターへの気持ちを理性で押し殺そうとするが、果樹園でのロチェスターとの会話の中で、これまで内に閉じ込めていた感情が一気に爆発し、ロチェスターに愛の告白をしてしまう（215-16)。ジェインに見られるようにシャーロットもまたカウアン・ブリッジに対して長い間抑えていた怒りの感情が行き場を失い、『ジェイン・エア』でローウッドを描く際にその想いが一度に解き放たれたと言えるかもしれない。しかしシャーロットの記憶がどれほど歪められていたかは明確に示されることはできない。ただ、ベンソンは、パトリックが二人の娘を失ったことでカウアン・ブリッジに不満を述べたり、訴えたりしていなかったし、実際ギャスケルもカウアン・ブリッジの記述が正しくなかったと認めていることが、シャーロットが大げさに表現した何よりの証拠であるとしている（27)。

ベンソンが述べているように、二人の娘を失くしながらも、パトリックはそれについてカウアン・ブリッジの責任を問うことをしていないので（27)、学校の衛生管理が悪かったと、彼は思っていなかったかもしれない。しかしシャーロットの記憶が細部にわたってすべて真実であったとは言えないが、シャーロットはパトリックと違い、カウアン・ブリッジの学校生活を実体験している。したがって、パトリックが見ていない部分をシャーロットは目の当たりにしていたのだ。したがって、シャーロットの記憶が細部に関しては長い年月を経るうちに歪められていたとしても、『ジェイン・エア』に書かれているすべての描写が彼女の誇大妄想だったということはできないと思われる。それゆえ、パトリックが学校を訴えず、満足していたからといって、シャーロットが記憶違いをしているというベンソンの主張を受け入れることは難しいのである。

## 5．エレン・ナッシーとの友情

エレンがシャーロットにとって無二の親友であることは言うまでもなく、ギャスケルはエレンから借りたシャーロットの手紙を基に伝記を書いた。しかしベンソンは二人の友人関係についてギャスケルが述べてはいない興味深い指摘をしているので、見ていきたい。

シャーロットとエレンはロー・ヘッド学校で知り合ったが、最初から二人が意気投合したわけではなかった。そのことについてベンソンは次のように述べている。

> But that indifference soon passed and gave place to one of those violent homosexual attachments which, so common are they among adolescents of either sex, must be considered normal rather than abnormal. (38)

ベンソンは、無関心だった二人が、「同性愛（“homosexual attachments”）」(38) のような感情を抱くようになったが、これは思春期にはよくあることであると述べている (38)。実際、ヴィクトリア朝時代、女性同士の友情は家族の間でも提唱されていた。というのは、当時の女性の最終目的は結婚とされ、幸せな結婚生活を送るには、まず女性同士で友情を育み、相手を尊重し、愛するとはどういうことかを体験しておくことが重要であると考えられていたからである (Marcus 26)。したがって、女性同士の手紙のやり取りにおいては、当時異性の恋人には憚られるような言葉を使うことも許されていたのである。

シャーロットとエレンもまたその例にもれず、シャーロットの手紙にはベンソンが指摘するようにまるで恋人を想うような同性愛的な感情にあふれている。また、ベンソンは「あなたのいちばんの魅力は、宗教から生まれているのです。そしてその影響が、今のあなたのように、心も行いも清らかで、控えめで、善良な人である状態を、いつまでも保ってくれますように。あなたに比べたら、私は一体何者だというのでしょう。(“It is from religion you derive your chief charm, and may its influence always preserve you as pure, as unassuming, and as benevolent in thought and deed as you are now. What am I compared to you?”) 」(Smith 153) というシャーロットの手紙を引用した後で、「人間の情熱や宗教的な恍惚と疑念が入り混じって燃え上がり、ますます高く立ち上って空を舐めるほどになる。(“The flame of this furnace compounded of human passion and the religious ecstasies and questionings which is kindled, mounts higher and licks the sky”)」(41) と述べている。ベンソンは、シャーロットとエレンの友情が情熱（“human passion”)、宗教的恍惚（“religious ecstasies”)、疑念（“questionings”）が入り混じって、燃え上がっていくと分析している (38)。二人の友情をこれまでブロンテ研究家たちはあまり着目してこなかった。ましてやベンソンのように細かく分析した伝記作家もほとんど見られない。それゆえ、ベンソンが二人の友情に焦点を当て、その本質が同性愛的なものであり、それはさまざまな感情が入り混じって燃え上がっていくという指摘は重要である。

さらにベンソンは次のシャーロットの手紙を引用している。

If I could always live with you, if your lips and mine could at the same time drink the same draught at the same fountain of mercy, I hope, I trust, I might one day become better, far better than may evil wandering thoughts, my corrupt heart, cold to the spirit and warm to the flesh, will now permit me to be. (Smith 156)

上記の引用が示すように、シャーロットはエレンがそばにいてくれたら、自分がもっとよくなれると考えているが、言い換えれば、シャーロットは自分がいかに罪深いかについても強く意識している。ベンソンはこの手紙からシャーロットの罪の意識を次のように述べている。

Much comment has expended on this fervency of religious emotionalism, which has been represented as a morbid but temporary hysterical affection: biographers, Mrs Gaskell among them, slightly bewildered at it, have preferred largely to suppress it as being a disturbing and inharmonious feature in their preconceived portrait of Charlotte. (Benson 43)

シャーロットのこの宗教的感情の強さについては「一時的なヒステリー的状態（“temporary hysterical affection”）」(Benson 43) であったと解釈されるが、ギャスケルはこれがシャーロット像にそぐわないと考えて、これを書かずに隠すことを選んできたとベンソンは述べている（43)。ベンソンのこの分析は非常に重要である。ギャスケルはシャーロットのヒステリックで病的な部分を隠すとともに、二人の友情が同性愛と言えるほど、情熱的に燃え上がっていることには一切言及していない。ギャスケルは、シャーロットとエレンがあくまでも女性同士の友情と言う固い絆で結ばれていると思わせたかったのであろう。なぜならギャスケルの伝記の執筆目的は、シャーロットがいかに女性らしいかということを明らかにすることであったからである。シャーロットが少しでも批判されたり、誤解されることをギャスケルは恐れていた。それゆえ、ギャスケルは彼女たちの関係が同性愛に類似したものだったと感じたとしても、道徳から逸脱するような表現を決して使わなかったのである。

さらにベンソンはこれまでブロンテ研究者が分析してこなかったシャーロットのエレンへの気持ちを次のように述べている。

Never again did she give her heart to anyone, man, or woman in joy and exaltation, and it was her human adoration for Ellen that kindled in her this religious emotionalism. (43)

すなわちシャーロットが罪深さを感じ反省するのも、また宗教的恍惚といえるような喜びを感じるのも、すべてはエレンに対する人間的な崇拝が基となっており、その感情は宗教的感情にまで高められるのである（ベンソン 43)。さらにベンソンは、二人のこの感情の高ぶりは性的なものを伴わない本物の愛の高揚だと述べている（44)。ベンソンのこの指摘は正しいと思われる。

シャーロットはエレンとの対話を通じて、価値ある友人になるために、内省し、自己修練をし、内面的成長を遂げている。それはまさにベンソンが述べている「本物の愛の高揚（“the authentic ecstasy of love”）」(44) だと言えるのである。

## 6．おわりに

ベンソンは全般的にはギャスケルの伝記を踏襲しているが、これまで述べてきたように、少しではあるが彼独自の見解を展開している部分もある。ベンソンの伝記において、顕著に素晴らしい部分はシャーロットとエレンの友情の部分である。前述したように、ブロンテ研究において、シャーロットとエレンの友情に関してはこれまであまり分析されてこなかった。

ベンソンが指摘しているように、シャーロットとエレンの関係は、性的パートナーではないが、感情の面では特別な親しさをもつ同性愛的性質もったものである（38)。ベンソンはこのような同性的愛は性別に関係なく、思春期の友情においてよく見られるもので、決して異常なものではないと述べている（38)。

ベンソンは言及してはいないが、ヴィクトリア朝時代の女性同士の友情には、大きな役割があった。ヴィクトリア朝時代は、“separate spheres” という、ジェンダーの役割がはっきりした時代であった。当時、こうした女性たちの手引書となったのがエリス（Sarah Stickney Ellis）の*The Women of England*（1839）であった。エリスは女性同士の友情が社会的に、また家庭内において重要な役割を果たすと考えていた（201-03)。前述したように、結婚前に友情を通して疑似的恋愛を経験することで、女性たちは愛情をもって相手を尊敬し、信頼するという他者との関係を学ぶことができ、それはのちの結婚において非常に有益なものとなるからである。すなわちジェンダー・イデオロギーという観点から、ヴィクトリア朝時代において女性同士の友情はとても重要なものだったのである。したがって、ベンソンがシャーロットとエレンの友情に目を向けた点は非常に大きい。ギャスケルは二人の友情をごく普通の絆として描いたが、ベンソンはそのようには見ていなかった。シャーロットのエレンに対する感情は、同性愛的性質をもった宗教的恍惚ともいえる感情の高まりだと見なしていたのである。

これまで見てきたように、ベンソンはギャスケルの伝記をほとんど踏襲しており、決して秀逸なシャーロットの伝記とは言えないが、シャーロットとエレンの友情に目を向け、それについて深い洞察力を示している。したがって、もし彼が二人の友情をさらに綿密に分析していけば、数多あるシャーロットの伝記のなかで、強烈な個性を残す作品となったかもしれないのである。

**注**

1．ベンソン家のきょうだいは数多く作品を残したが、必ずしも名声を得ることはできなかった。しかし彼らは自分たちが風変わりで、彼らの人生を復元する価値があると思っていた（Sanders 220）。

**引用文献**

Barker, Juliet. The *Brontës*. Pegasus Books LLC., 2010.

Benson, E. F. *Charlotte Brontë*. Longmans, Green and Co.,1932.

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*, edited by Richard J. Dunn, W. W. Norton & Company, 2001.

Danahay, Martin. *A Community of One: Masculine Autobiography and Autonomy in Nineteenth-Century Britain*. State University of New York Press,1993.

Ellis, Sarah. *The Women of England: Their Social Duties, and Domestic Habits*. Fisher, Son & Co.,1839.

French, Yvonne. *Elizabeth Gaskell*. Home & Van Thal. 1949.

Gaskell, Elizebth Cleghorn. *The Life of Charlotte Brontë*. Edited with an introduction and notes by Alan Shelston, Penguin Books,1985.

Layland, F. A. *The Brontë Family*. Vol. 1, Hurst and Blackett,1866.

Marcus, Sharon. *Between Women*. Princeton UP, 2007.

Reid, Thomas Wemyss. *Charlotte Brontë：A Monograph*. Macmillan & Co.,1877.

Sanders, Valerie. "'House of Disquiet': The Benson Family Auto/biographies." *Life Writing and Victorian Culture*, edited by David Amigoni, Routledge, 2017.

Smith, Margaret, edited by *The Letters of Charlotte Brontë*. Vol. 1, Clarendon Press, 1995.

Taylor, Jenny Bourne and Sally Shuttleworth, edited by *Embodied Selves: An Anthology of Psychological Texts, 1830-1839*. Clarendon Press,1988.